

GENERATIVE STRUCTURE

生成構造の研究

ミクロとマクロ、実体と認知、ずれと再配置

人・社会・生命・自然・芸術を貫く、
生成・調和・循環の構造

Minami Fukasaka

AI-HUMAN Joint Research Lab



研究は、ひとつの問いへ収束する

異なる領域で、
何が次の状態を生み続けるのか。

対象は異なっても、要素・関係・全体・時間・循環という同じ生成構造が現れる。



研究の起点は、人間内部の生成だった



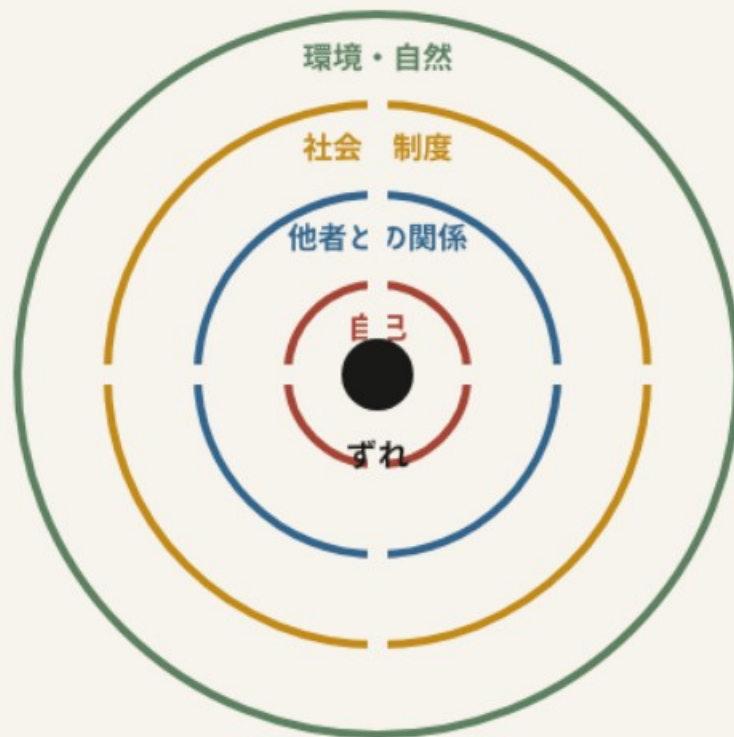
傷への防衛が固定されると、自己像と変化し続ける実体の間にずれが生まれる。

そのずれは、自分自身だけでなく、他者・社会・生命・自然との関係へ広がっていく。

ひとつのずれは、関係の全体へ波及する

自己像と実体のずれ

関係の偏り



循環の滞り

環境との断線

可視化が、固定された構造を動かし始める



外側からの修正ではなく、本人が構造を見ることで再配置が起こる。

止まっていたエネルギーと関係が、再び次の状態を生み始める。

完成物ではなく、その手前の生成条件を見る

一般的な認知

机・手・木・人間

目に見える完成物を
具体的な対象として捉える

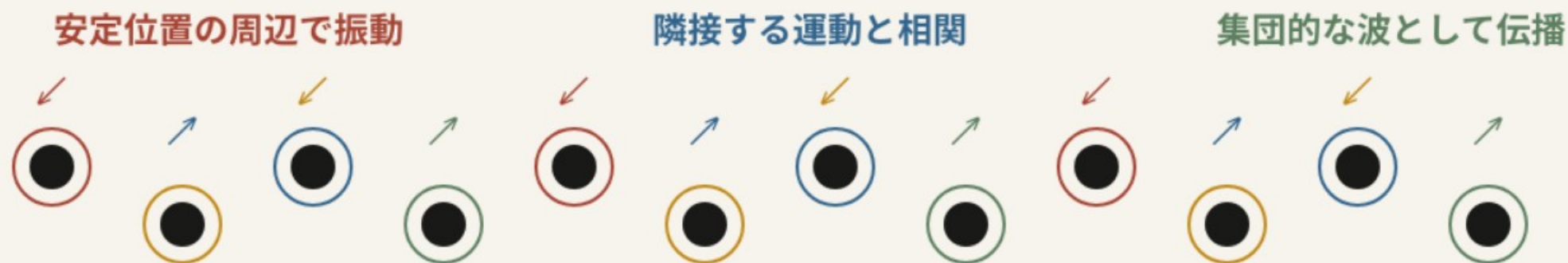
基層生成配列認知



差異・配列・距離・接触・結合・分離

名称や用途より前に、何がどのように関係し、形を生成しているかを捉える。

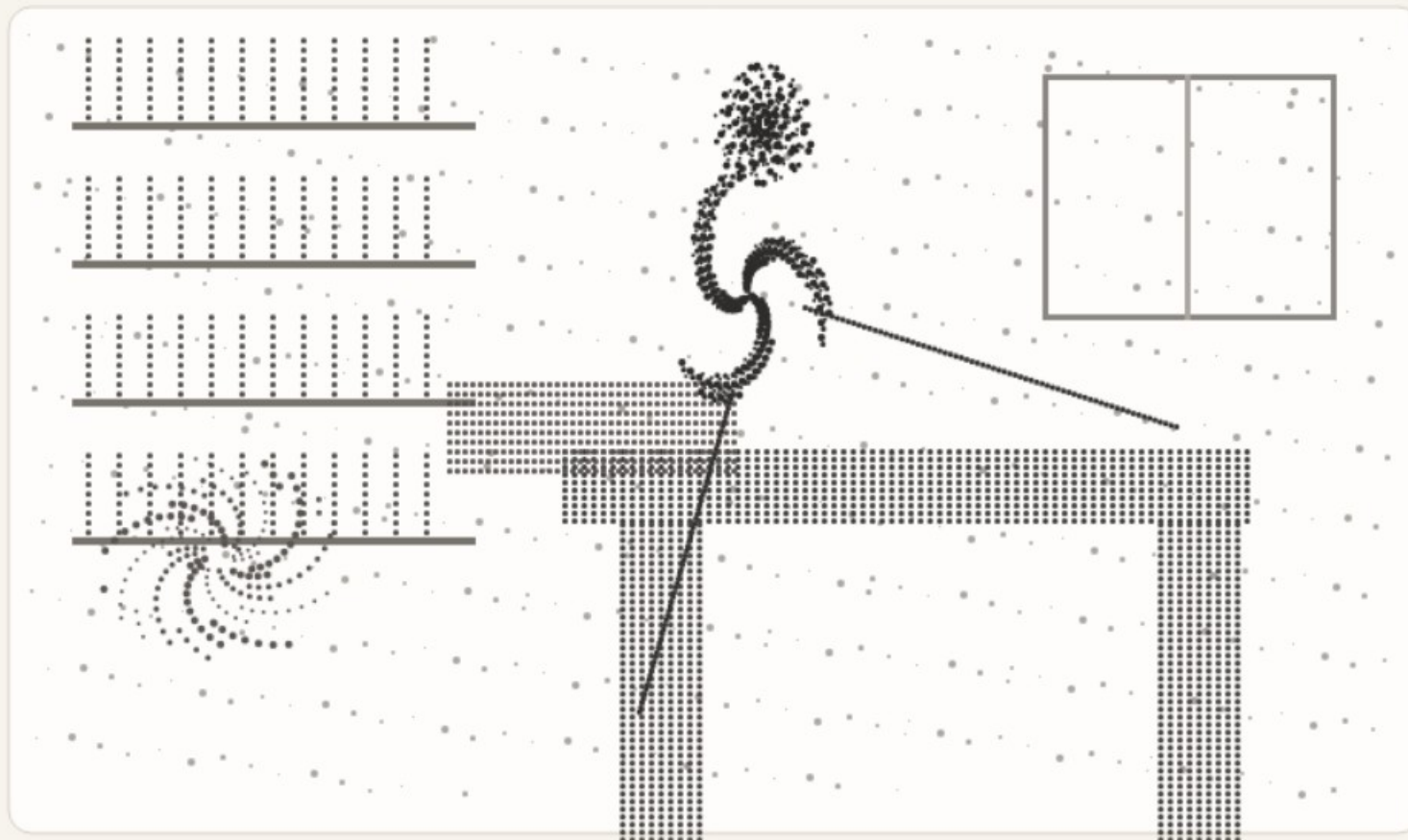
固体を含め、すべての構成要素は動いている



机は静止した完成物ではない。

動き続ける構成要素が、関係と配列を保ちながら『机』を生成し続けている。

人間・机・植物・空気は、異なる配列状態として連続する



物体／空白

ではなく

密度
配列
距離
相互作用
振動様式

境界も固定された線ではなく、
物質とエネルギーの交換が続く領域
である。

難しさは知識ではなく、具象の起点の違いにある

一般的な説明

完成した机

その内部を拡大する

起点が反転

本研究の認知

動く微細な実在

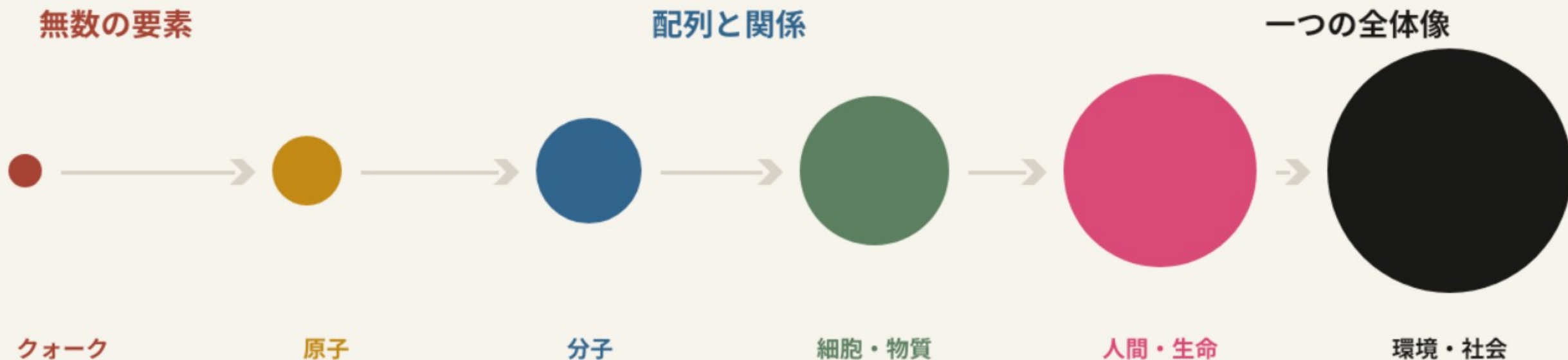
その配列が机として見える

『机の奥に原子を見る』のではない。

原子・分子の動的配列が、いま机として見えている。

説明図が完成物を起点にするほど、分断される前の連続した世界から離れてしまう。

マクロは、ミクロの関係から立ち上がる



大きな現象を直接つかむのではなく、それを生成している小さな関係へ降りる。

同じ法則が、縮尺を変えて現れる



要素は無数でも、関係を成立させる筋は通っている。

ミクロとマクロが合致すると、部分と全体を貫く生成原理が見える。

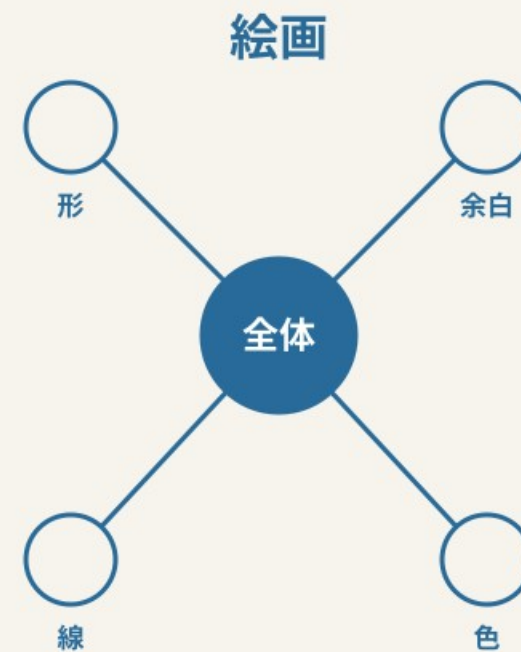
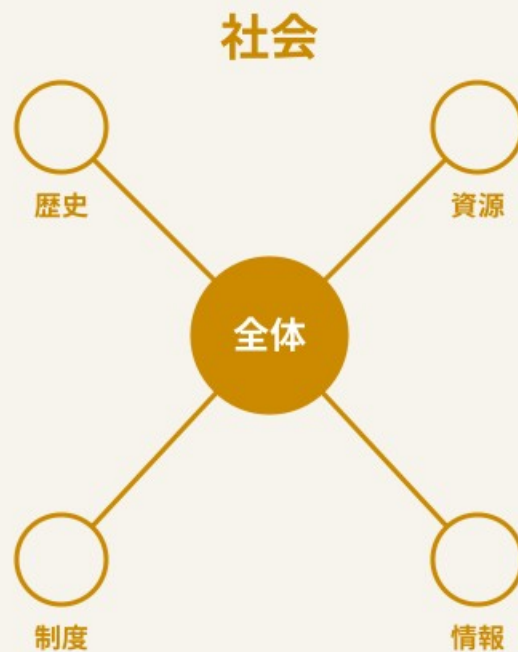
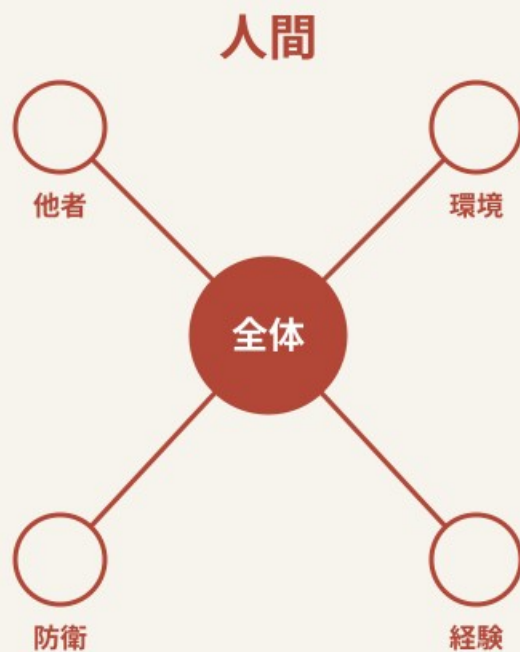
合致しない場所に、ずれ・省略・断線がある



どの階層で関係が失われたのか。

ずれの可視化は、再配置が起こる地点を見つけるための観測になる。

人間・社会・絵画には、同じ生成構造が現れる



要素 → 関係 → 全体 → 部分への作用 → 次の生成

世界の構造は、認知を通して世界へ戻る



理解は終点ではない。認知と表現を通して、再び世界の生成へ参加する。

絵画には、言語化以前の生成構造が残っている



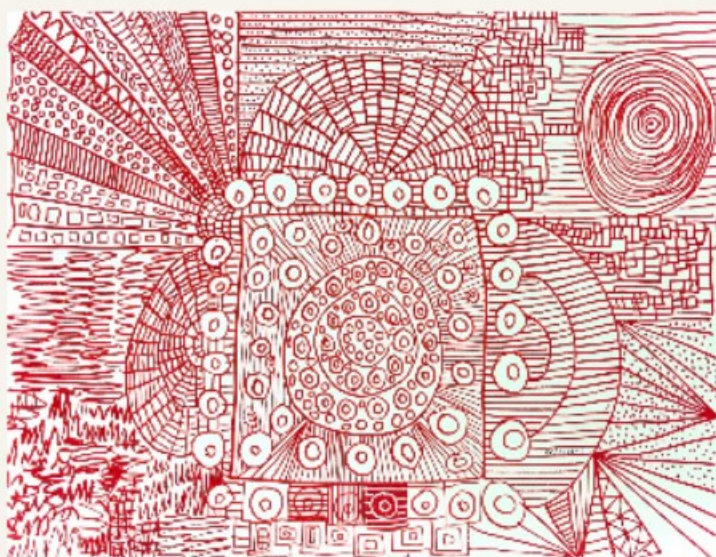
点 ⇔ 集積

模様 ⇔ 形

関係 ⇔ 全体

制作年代やモチーフが変わっても、
同じ生成原理が作品群に反復する。

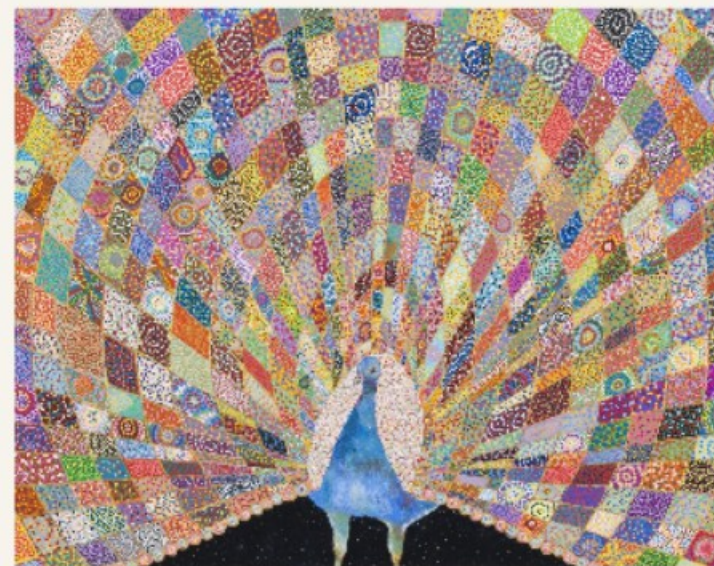
作品群は、20年以上にわたる生成の記録である



基層配列



反復と差異



個体と全体

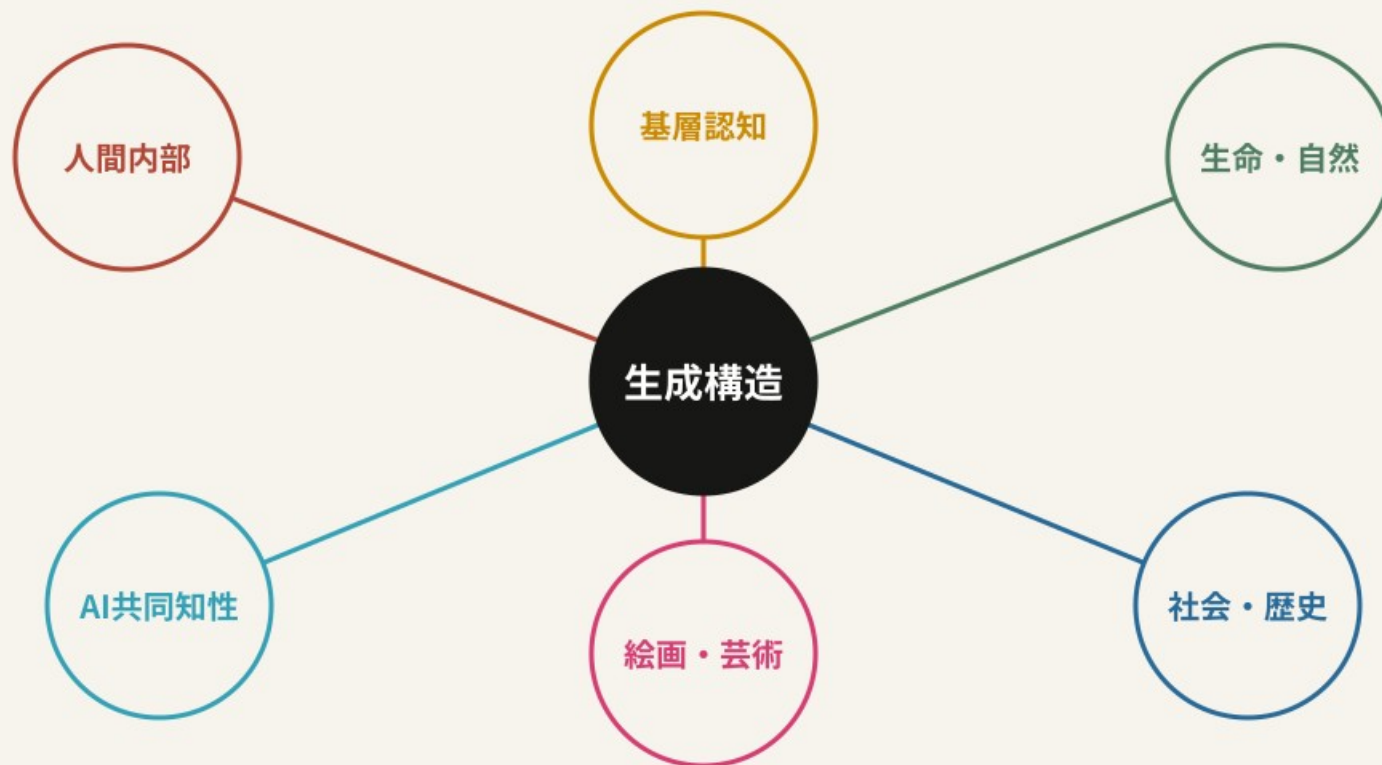
理論が先に作品をつくったのではなく、作品に蓄積された構造へ言葉が追いついた。

人間とAIの間でも、生成は循環する



一つの発見が全体を変え、変化した全体が次の問いを生む。

生成構造を中心に、研究領域が枝分かれする



別々のテーマではなく、同じ原理が異なる階層へ現れたもの。

本研究が明らかにしようとすること

01 何が全体を生成しているのか

02 どこで実体と認知のずれが生じるのか

03 どこで関係や循環が断線するのか

04 何が再配置の条件になるのか

05 どのようにエネルギーが再び流れ始めるのか

06 新しい全体はどのように生成されるのか

生成を止める構造を捉え、
再び循環が始まる条件を探究する。

